

# チム九

印刷を支え加工を活かす

## 工場本部 本社工場 無線綴部門 足立勉

2014年に旭紙工業株式会社に入社した足立勉さん。瓜破工場の東大阪工場時代より中綴じ工程に携わり、2020年12月からは工場本部で無線綴じを担当しています。入社までの経緯と新たな業務に奮闘する日々、今後の展望についてお聞きしました。



「これまで経験したお仕事と、入社理由を教えてください。」

10代の頃は製本会社に勤めていましたが、入社して6年後に会社が廃業してしまい、当時工場勤務に疲れていた私は、知人の紹介で繊維業界に携わることになりました。海外から仕入れた品物の検品では、その頃生産の中心だった中国やベトナムの、汚れに対する意識が日本と大きくかけ離れていることに驚きます。「これくらい良いだろう」と布団の汚れも気にしない人々に、世界で最も厳しい「日本基準」を理解してもらうのは、なかなか大変なこと。それでも根気強く判断基準を伝え続け、約20年勤務しました。

その後、年齢を考えて「もう1度、経験のある製本の仕事をしよう」と新たな職場を求めました。旭紙工への入社決め手は、製本経験者として雇用してもらえたこと。東大阪工場で働き始めてからは、工場長や副工場長の人柄と、その働きぶりに惹かれ「ずっとこの人達と仕事がしたい」と思うようになり、今に至ります。

「現在はどうのような業務をされているのでしょうか。」

昨年からは無線綴部門に異動し、今も指導してくださる方に付いて機械の操作方法を覚えていく最中です。作業の流れは中綴じと変わりませんが、綴じに使うのが針金ではなく糊となり、1人で操作していた機械も、数人で扱う大型の機械へと変化しました。同じ本を作る仕事であっても、実際に作業してみると全く別物だと思えるほどの違いがありますね。今はたくさんの方に質問をしながら、少しでも早く戦力になれるよう努めています。

「これまでのお仕事で、成果を自慢できる経験はありますか。」

マイナンバー制度に関する仕事を請け負った際、これまでで1番の利益を出せたことです。もちろん、最初から順調だったわけではありません。始めたばかりの頃は不慣れだったのに加え、製本後に折りの工程も入る複雑さ。1時間の生産数はわずか6000冊ほど。何百万単位の仕事だったものの、時間がかかりすぎ、単価も見合わない状態でした。

そんな中「どうにか生産性を上げよう」と、機械の調整や作業の効率化を追求。徐々にスピードアップし、最終的には1時間に約9000冊の生産ができるようになったのです。絶望的な状況から最大の利益を出して作業を完了できたので「最もやり切った仕事」だと言えますね。

「反対に、挫折や失敗の体験はありますか。」

穴開け作業をしていた時、位置のズレに気付かず何百冊も穴を開けて

しまったことです。失敗した物は廃棄となり、しかも最終的に数が足りず、刷り直しに。これは手痛い失敗として記憶に残っています。ずいぶん前の出来事ではありますが、それ以来、常に本同士を裏返して穴の位置を十分確認するよう、今でも気を付けています。

「最後に、今後の意気込みや目標についてお聞かせください。」

部署を異動して、入社以来一番大きな目標を掲げています。それは、無線綴じ作業を引っ張っている若手社員達を盛り上げ、さらに成長し、部署の規模をもっと大きく成長させていくこと。実は「職場をより明るくする」というのも、異動の目的の1つ。そのために心がけているのは、常に周囲に声をかけること。コミュニケーションが活発になれば雰囲気も良くなり、働きやすさにも繋がります。皆が笑顔で仕事ができるように、これからも尽力していくつもりです。



仲間を盛り立てるため、これまで以上に強い目的意識をもって業務に当たっている足立さん。さらなる躍進に、今後も目が離せません。

### 企業情報

- ◆ 創 立 年 : 1983年1月
- ※ 創 業 : 1963年
- ◆ 年 商 : 15億円
- ◆ 従 業 員 数 : 200人

※ 2018年12月実績



# 設備紹介



瓜破工場でメイン機として稼働している紙折り機「ハイデルベルグ」。一体どのような特徴や利点があるのか、課長を務める寺山さんにお話を伺いました！



私が紹介します！

工場本部  
瓜破工場 課長  
てらやま こうさく  
寺山 幸作さん

## Q. ハイデルベルグとはどのような機械ですか？

簡単に言うと、紙折り機です。紙はA1～B5まで折ることができ、工場のメインの機械としてほぼ毎日稼働しています。目的としては、主にチラシを折ったりカタログを作ったりするために用いています。私たちの会社が所有しているハイデルベルグの製品は3種類あり、1つ目が縦積み、2つ目がラウンドフィーダー、3つ目が小型のラウンドフィーダーであるスタールのミニです。



メインの紙折り機  
ハイデルベルグ！

## 3種類の ハイデルベルグ、 その特徴は？

### Q. ハイデルベルグの種類について詳しく教えてください！

まず紙を折る際には、折るための紙を機械に手で積む必要があります。そして初めに積んだ紙がなくなったら、再度積まなければなりません。ここで、縦積みとラウンドフィーダーの違いが顕著に表れます。縦積み場合は紙がなくなると、一旦機械を止めなければ積み直すことはできません。一方、ラウンドフィーダーはそのまま積むことができるため、ノンストップで稼働することができるという利点があります。縦積みだと稼働率は75%ほどですが、ラウンドフィーダーは100%の稼働率を誇るということです。



た、ラウンドフィーダーはユニットという別の機械を繋げることで、様々な折り方に対応することができます。このユニットは数え切れないほどの種類がありますが、特徴的なものでは「8ページ折り」という2つ折りを2回行う手法が挙げられます。このような折り方は縦積みでもできなくはないのですが、生産数が圧倒的に少なくなってしまうことを考慮し、あまり行われません。ただ、縦積みにもメリットがあります。1つに、ラウンドフィーダーだと2人掛かりでなければいけないところを、1人で行うことができることです。また、折り方を決め寸法を測ってと言った、紙を折る準備であるセットに掛かる時間が非常に短いです。そして、スタールのミニはラウンドフィーダーと同じ特徴を有していますが、通常のものとの違いは何と言っても対応可能な紙の大きさが小さいことです。通常、A1まで加工可能なところ、スタールのミニではA3くらいまでの大きさしか扱えません。一方、そのメリットはA4やB5の紙を折るスピードが早いことと、機械自体も小さいのでセットがしやすいところにあります。以上の3種類のハイデルベルグを所有しており、数は縦積みが1台、ラウンドフィーダーが9台、スタールのミニが4台です。

## 怪我に注意！

### Q. 使用上の注意はありますか？

最も気を付けるべきは怪我です。ローラーに指を挟まれるなどの怪我が以前までは頻発していました。特に機械に紙が詰まったときに、機械が止まっているように見えても、紙をそこから抜くと突然動き始めることがあります。そのため現在は、緊急停止を先に押したかどうか確認することを徹底しています。

## 若手社員 への想い

### Q. 今後の目標をはありますか？

私は現在、ハイデルベルグを稼働させる前のセットを若手社員に教育をしています。そのため、指導中の全員が機械をちゃんと扱えてベテランになれるようサポートしていきたいと考えています。機械を使うにあたり、セットという作業は毎日行われますが、人によっては1時間でできたり2時間も掛かったりと難易度の高い部分でもあります。さらに、セットの良し悪しによって、作業の効率も変わってきます。そのため、次の世代を育てているという認識を持ちながら、若手社員たちにメインで機械を扱えるくらいの技量を身に付けてほしいと思っています。

